

地域看護学実習 I における 看護学生のストレス対処能力とストレスの実態

新潟医療福祉大学看護学科・稲垣千文, 小山歌子

【目的】

本学の看護学科3年次後期の地域看護学実習 I に臨む学生の、ストレス対処能力と、ストレス内容及びその対処方法を明らかにすることを目的とする。

【方法】

1) 研究対象者, 地域看護学実習 I を履修する看護学科3年生, 89名。2) 調査時期, 方法, ①実習前, 実習終了後質問紙調査法の実施。3) 調査内容, ①実習前, 社会学者の Aaron Antonovsky が作成し, 山崎喜比古らが邦訳した SOC 尺度 29項目版 (以下 SOC 尺度とする) を用いストレス対処能力 SOC (以下 SOC とする) の測定¹⁾²⁾³⁾。②実習後, 変化を測定するため, 再度 SOC の測定。③先行研究を基に研究者が作成した調査票で, 実習中のストレス内容の順位を問い, 理由と対処方法の自由記述。4) 調査票回収は留め置き法。5) 分析は実習前後の SOC が揃っているものを対象に, ①実習前後の SOC 変化の比較, ②実習中のストレスに対し SOC の中央値で2群に分け比較, ③ストレスの理由と対処方法は, 質的帰納的に分析。6) 本研究は, 本大学の倫理審査で承認を受け実施。

【結果】

学生36名より回答を得た (有効回答率40.4%)。実習前後の SOC を表-1 に示す。

表-1 実習前後SOCの比較

SOC	実習前	実習後	実習前後比較
平均値	117.4	114.7	ウイルコクソンの符号順位和検定 Z=1.393366 (P=0.163509)
標準偏差	21.30	21.42	
最大値	160	159	スピアマンの順位相関係数 rs=0.8644 (P<0.01)
最小値	52	64	
中央値	117	117	

SOC の得点は, 実習前後で差はなかったが, 実習前後で強い相関 (rs=0.8644, P<0.01) がみられた。また, 実習前後で SOC の下位尺度である処理可能感が実習後に低下 (Z=2.1209, P=0.0339) している。(表-2)

表-2 実習前後のSOC 下位尺度の比較

下位尺度	把握可能感	処理可能感	有意味感
下位尺度の範囲	12~84	9~63	8~56
実習前	41.97	39.83	35.89
実習後	40.97	38.00	35.75
ウイルコクソンの符号順位和検定		Z=2.1209 P=0.0339	

実習前後で, SOC を中央値117で分け, 高位群 (117点以上19名), 低位群 (116点以下17名) とし, SOC 尺度29項目毎に検討した。SOC 高低位群の比較で, 差があった項目は, 実習前は, 有意味感を示す2項目 (問14生きていて良かったと感じる, 問16毎日していることは満足と喜びを与える) であった。実習後は, 有意味感を示す1項目 (問14生きていて良かったと感じる), 把握可能感を示す1項目 (問21 本当なら感じたくないような感情を抱く) であった。(P<0.001)

実習後 SOC の高低位群を比較し, 実習でストレスと感じた内容 (表-3) の1位は, 高位群「実習記録: 地域アセスメント」を, 低位群「人間関係: 実習メンバー」であった。

表-3 一番ストレスと感じた内容

SOC	実習記録	自己の能力	人間関係	実習内容	実習中の環境	生活の変化
高位群 (19名)	7名 36.8%	6名 31.6%	3名 15.8%	3名 15.8%	0 0%	0 0%
低位群 (17名)	5名 29.4%	3名 17.6%	8名 47.1%	1名 5.9%	0 0%	0 0%

高位群ストレス1位「実習記録: 地域アセスメント」の理由は, “必要なデータが見つからない” “地域アセスメントが難しい” “アセスメントの方向性が相談できなかった” “何度も考え直す事が大変” であり, 対処方法は, <グループのみなどで協力・分担した> <グループですることで勉強になり, ストレスも軽減すると思った> であった。

一方低位群1位「人間関係: グループメンバー」のストレスの理由は, “協調性に欠けるグループメンバーの存在” “リーダーの不在” であり, 対処方法は, <耐えた> <協調性のないメンバー抜きで協力した> <他の友人に相談した> であった。

【考察】

実習前後での学生の SOC の高低の差は, 有意味感の中でも, 「自分は生きていてよかったと感じる事」であった。この感覚は, 基本的信頼感と関係すると考えられる。SOC は生育歴と関連するといわれており³⁾, SOC 低位の学生は, この感覚を得る為の刺激をあまり受け取らなかった可能性が考えられる。

SOC 低位群は, 人間関係のうち実習メンバーをストレスとしていた。地域看護学実習は, 実習メンバーで協力して取り組む内容が多くある。SOC 低位群は, 実習をメンバー全員で取り組むことが出来ず, また, 情緒的対処が多くとられていたことなどがストレスにつながったと考えられる。また, SOC はストレスに対処する資源 (汎抵抗資源) の動員力を表すと言われている³⁾。このことから, SOC 低位群の学生は, 他に援助を求めること, 援助を活用することが苦手であり, 実習中に教員が更に援助をする必要があることが示唆された。

【結論】

1. 実習前後では SOC に変化はなかったが, 実習によって処理可能感が低下した。
2. ストレスの実態は, SOC 高位群は地域アセスメント, 低位群は, 実習メンバーであった。
3. ストレス対処方法は, SOC 高位群は汎抵抗資源の動員, 低位群では, 情緒的対処であった。

【文献】

- 1) アーロン・アントノフスキー著 山崎喜比古・吉井清子監訳: 健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム, 株式会社有信堂高文社, 2010。
- 2) 山崎喜比古: 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康補助能力概念 SOC. Quality Nursing Vol.5(10) 1999. 81-83。
- 3) 山崎喜比古 戸ヶ里泰里 坂野純子編: ストレス対処能力 第2版 株式会社有信堂高文社, 2012。